

# ゼロ番地の男たち

桜藤 伸

皆さんはゼロ番地と聞くと何を想像するだろうか。

この世に生を受けたものは誰でも必ずや行き着くところがある。

それは火葬場と呼ばれる所、いわゆる斎場といったらわかりやすいだろうか。

ではその裏側で一体何が行われているかご存じだろうか。

「そりゃ火葬場なんだから人を燃やしてるんでしょ」

「どのくらい焼けたかチェックする人が居て、たまに棒で突ついたりするんじゃないかな？」

強ちその回答は間違っていないだろう。

〇〇検索やYouTubeなどで調べたらおおよそのところ見当がつく。

しかし、この話はたぶん、きつとそんな仕事あったんだと「へえー」となる方もいるだろう。

実際、恥ずかしながら私は半世紀以上生きてきたが数年前までは知らなかった。日々の生活の中で考えることすらなかったからだ。

皆さんも私と同じであったならば、この内容を少しばかり共感していただけるのじゃないかと図々しくもそう願っている次第である。

昨今、日本に於いて火葬の割合は99・9パーセントに上る。戦後5割程度だったが時代と共に昭和40年代には7割を超えている。(一部まだ土葬のところもあるにはあるが)

誰もが母親の体内から誕生した瞬間から生き物はみな、死へのカウントダウンが始まっている。

不老不死をテーマにした雑誌を見かけるが今の所、現実的ではないと推測する。

本屋で『不老不死』の4文字を目にしたら、つい立ち読みをしたくなるし、テレビのチャンネルを変えた途端そんな話題がやっていたら皆さんはどうだろうか。

私は魔法にかかったようにその場から動けず、すかさずメモを用意して長寿の秘訣は一体何なのかと興味深々で見入ってしまう。確かに研究データで体に良い物はこれだ！などとよくやっついて翌日のスーパーではその食材があつという間に売り切れたりする。

人生百年時代とも言われるがそんな食べ物があつたら飛びつきたいものだ。

もしかしたら、そんなものいらなと思う方も中にはいるだろう。

「寿命があるから人生楽しい訳でわざわざ長生きなんかしないでいいわ、人間が死なない

時代がくるなんて変でしょ。それじゃあ、ロボットだ」と。

まさにAIだ。

今のこの時代に不老不死が実現していないのはできないのではなくて、敢えてしない説もあつて製薬会社や医者が増えなくなる。年寄りがそうでなくても増えて、すでに超高齢化社会を迎えている今日この頃なわけで、これ以上そんな薬なんぞできたらたまらんと〇〇政府の差し金で開発は先に進めない？進まない？のが現状なんだと何処かのテレビで見たような……。うろ覚えであるが私の華奢な脳裏の片隅に残っている。

そんなわけで現在私達が生きるこの世の中では現状、皆無に等しいわけだ。

さて話が横道にずれてしまったが本題に入りたい。

前出では火葬の実態を軽く述べたが、表側からは決して見ることがない裏の世界を紹介したい。

それは築炉工（ちくろこう）という煉瓦職人だ。

今日もまだ朝の8時前だというのに防護マスクにヘルメット、安全靴を履いて汗だくなつて働くプロ集団がそこにいた。

彼らは簡単にいうと焼き場の窯を作っているのだ。

〇〇斎場の裏手の狭い炉の中で勝さんの怒号が聞こえる。

「おら、とろとろやってんじゃねえぞ、陽が暮れるぞ」

「はい、今すぐ」

勝さんの手元を務めるのは30代、独身貴族の山ちゃんこと山神さとしだ。仕事が終わってコンビニでビールとおつまみで一杯やるのが何より楽しみな今どきの若い兄ちゃんだ。この仕事に就いて3年。まだ煉瓦は積ませてはもらえない。先輩のお手伝いというところだ。お手伝いと言っても適当では許されない。いなくてはならない大事な役割だ。

誰よりも先に現場に着いて準備を怠らない。1袋25キロにもなるモルタル（セメントに砂を加えたもの）を攪拌機に入れ、水を加えて練る。そしてこれから積む予定の煉瓦を一輪車に乗せて何往復も炉前まで運び込むのだ。

黙々と作業する姿は凛々しく逞しい。

と、ある日の午後、隣の火葬炉の表側から嗚咽が聞こえてきた。

どうやら小さな子の火葬がこれから行われるようだ。

きつと親御さんだろうか、我が子との今生の別れに言葉にならない非声がすぐそこに聞こえてくることがある。またある時は亡き人が生前好きだった歌を皆で歌ったり、最後の

声かけがあったりと……。

火葬炉の向こう側に遺族が集まり始めると斎場のスタッフから指示が出て音の出る作業は一時ストップになる。

作業している彼らは壁1枚挟んだ裏側にいる。

火葬炉の扉（断熱扉）というのは10センチ程にもなる分厚い断熱材が施されており、その重さは500〜600kgにもなる。そんな重厚な造りにはなっているのだが……。

「そんな時は声ができるだけ聞こえないように仕事に集中するしかない、私も子供を育てる親として居た堪れない気持ちになるよ。聞こうとして聞き耳立てているわけではないけれど、聞こえてくるんだよ。最後の言葉って本当の本心だと思うよね。言葉の重みを感じるよね」

と神妙な面持ちでそう勝さんは言った。

火葬炉は古くなると定期的に解体し、基礎から作り直す。

そんな時は灰まみれになる。基本、炉というのは稼働中、1000度以上になり、遺体は骨から灰になるのだが、灰は強力な集塵機で吸い上げられ別の場所に集められる。

都会の場合などは臭いの問題もあり外部に漏れないようにさまざまな配慮がされている。その灰の管をメンテナンスする日は友引と決まっている。何故なら斎場が休みになるからだ。ちなみに関西の方ではそういった慣習はないようだ。灰の粒子は非常に細かい為、普段以上の装備で行われる。タイベックとゴーグルの着用は必須だ。

身体にも影響がないとも限らないからだ。灰を長い期間吸うことは塵肺（じんばい）の危険が伴う。

1日の仕事が終わりに家に戻ると真っ先に勝さんはお風呂に直行するという。身体を清めると同時に死臭（灰）を取るためだ。

「この仕事をしだして嫁がなんか臭いしない？って言うんだよね。自分では慣れてしまってももうわからないけれど家族はすぐわかる。そこらへんで嗅いだことのない臭いがするって言うんだよね。しかも毎回同じ臭いじゃないらしくて。

で、それが灰なんだとわかってから誰だかわからないけれど、我々も最後はお世話になる場所なわけで、こういう仕事に関わっているということは何か尊さみたいなものと自然とお疲れさまでした。ゆっくり休んでください。という気持ちが無意識と湧いてくるようになってねえ……」

とこの道30年の風格を覗かせ言葉を重ねた。

築炉工は作業工程にもよるが大抵2人〜4人、多い時は6人程で回している。日本全国、請け負う斎場へと出向く。1基につきおおよそ1週間、何基も解体するとなると長くて1

ヶ月以上の作業になる。

現場仕事が続く間は休めない為家族サービスも儘ならないこともある。

例えば

子供のイベント事などがそれだ。

「いわゆる親とか、俺だったら嫁さんが亡くなった時以外は休めないと思っていて、だから子供の運動会だ、参観日だなんてものはもってのほか」

と言いつ切る。

今の世の中の風潮とはかけ離れているが、こういう仕事もあるのだ。

いやいや、これは勝さん独自の気質からきているのかもしれない。

50代半ばを過ぎた白髪交じりのその横顔は少しだけやせ我慢も垣間見れて、なんとも人間臭い昭和の男だ。

ここ数十年の気候変動で温暖化が進み、関東でも真夏は40度超えも珍しくなくなった。つい昨日まで稼働していた炉で作業することも多々ある。

その日の火葬が終わった後、炉の中に送風機（扇風機なるもの）で外気を一晚かけて送り込み、熱を冷ましておく。

屋内とはいえってもエアコンも効かない炉の中は案の定、熱が籠っている。

縦1・5メートル、横1メートル程の狭い空間に入って休憩以外は作業だ。180センチを超える背丈の勝さんは中腰が否応なしでも避けられない。腰痛のためコルセットを常に用意しているものも少なくないという。たとえぎっくり腰になっても痛め止めで凌ぎ仲間内でカバーする。

水分補給にしても真夏は1時間に5分程度は休むことになっている。息つく暇もないとはこのことだと驚くがその5分がなければ熱中症で倒れることもあるからだ。

自分でも気が付かないうちに突然意識を失うこともある。

家庭でも毎年炎天下の作業やまさかの屋内での熱中症も珍しくなくなってきているが、こまめな休憩と水分は誰でも大切となる。

靴を履いていても煉瓦から熱が伝わるんだそうだ。特に古い煉瓦を解体する時には、崩す量が多い場合はそれだけ蓄熱が放射され、まともに立っていられないほど身体に熱さが増す。

正に過酷な世界だ。それゆえに、職人の数は年々減少している。

そんな熱さの中でも、休憩の時の外気の自然の風は特段気持ち良く、心地いいと感じるのだという。

命というのは儂い。

しかし、尊いものなのだ。

何処の誰に生を受けたにしろ、無駄な命などない。それにはきつと意味があるのだ。

それは自分自身にしかわからない。胸に手を当て深呼吸をすると、

(ああ、私は生まれてきて良かったんだ。しっかりと生きなくちゃ)

と思える。

それぞれの人生があった亡き人達。築炉工がいう灰の臭いというのは一人ひとりの生きた証であり、残された愛する者への最初で最後の贈物なのではないだろうか。その贈物を生きる糧に変え、少しつづでも前に進んでいこう。後戻りしないようにきつと貴女の背中をそっと押してくれているはずだから。

その臭いとはまさに貴いに尽きる。

終わりに

表題の「ゼロ番地」というのは隠語である。

諸説あるがあこの世には番地がないということから由来している。

彼ら達が陽の目を浴びることはまずないだろう。

むしろそれを望んでいるのかもしれない。

誰もがこの世に生まれ、やがて土に還る。

今日も築炉工の……、

いや、

ゼロ番地の窯の中で、魂の声が聞こえてきそうさ。

本文中、不適切な表現が数か所ありますが、わかりやすく伝わるようにリアルな言葉にしているをご了承頂きたい。

又、臭いに関しても個人の主観であるため、拝察してもらえたら幸いです。

桜藤 仲

おうどう なか

1968年生まれ 千葉県出身  
1男3女の母  
訪問介護士として従事したのち、現在小説、エッセイを手がける。  
生、死、命についてのエッセイを得意とする。  
第19回「文芸思潮」エッセイ賞奨励賞受賞